駿台文学会

『分業によって人格的な諸力（諸関係）が物的な諸力へ転化されているのを再び廃棄することは、それについての一般的な表象を忘れさせることによってはできず、ただ個人がこれら物的な諸力を再び自分達のもとに包摂して分業を廃棄することによってのみできる。このことは共同体がなければ可能ではない。他人との共同体においてはじめて各個人は、彼の素質をあらゆる方面へむかって発達させる手段をもつ。したがって共同体においてはじめて人格的自由は可能になる。共同体のいままでの代用物すなわち国家などにおいては、人格的自由はただ支配階級の諸関係のなかで発達した個人たちにとってのみ、そしてただかれらがこの階級の個人達だった限りにおいてのみ、存在していた。いままで個人達が結合してつくりあげたみせかけの共同体は、いつも彼らに対して独立したものとなっていた。そして同時にまたそれは、他の階級に対しての一つの階級の結合だったから支配される階級にとってはまったく幻想的な共同体だったばかりでなく、また一つの新しい桎梏でもあった。現実的な共同体においては、個人達は彼らの連合のうちに、そしてまた連合によって、同時に彼らの自由をも獲得する。ー』

（「ドイツ・イデオロギー」）

我々駿台文学会は全精力を集中して斗った。だが学費値上げは阻止しえなかった。否、阻止しえなかったことと、それを斗う以前を上回る劣悪な状態の中におかれている。つまり明大当局による「学内暴力事件の続発」を理由とした学生会館の半永久的封鎖と、１４名の「被告」、そして３名の学友の「自殺」。このことが、我々の置かれている状況を端的に、しかも象徴的に物語っている。

それと厳重な注意を払わねばならないことの問題として、日本共産党＝民青諸君の動向と、革マル派という反スタ＝スターリニストの動向であろう。前者は学費斗争の中で、３年もの長期に渡ったⅡ法自治会の崩壊にピリオドを打ち、革命的再建を達成し、文字通り、全学の最前線で学部団交を実現し、一年生を基礎とした大衆運動展開を担ってきた戦斗的学友を、厚顔無恥にも自らのⅡ法自運動の破産をインペイし、胡塗せんがため官憲に売り渡したのだ。むろん、彼らは学費斗争に全く無関係ばかりか、関係があるとすれば、斗いへのケチツケと破壊策動でしかないのだ。

後者の革マル派は、今年の６月28日学館実力解放斗争を大衆的に取組んでいた戦斗的学友へ、鉄パイプによる完全武装で、テロ・リンチを行い、斗争の破壊ばかりか、敵対者としてたちあらわれてきたのだ。

このような局面において、秋期における自治会運動の展開について、我々Ⅱ文自治会は70年春期の安保決戦、秋期沖縄国政参加選挙粉砕、71年４ー５月の沖縄返還協定調印阻止、11月の比准阻止、72年沖縄返還粉砕と学費値上げ阻止を明大学生戦線の階級化・大衆化を学部段階で、断固としてストライキを背景に斗い抜いて来た。この戦斗的質をはっきりと継承しつつ、昨秋学費値上げ阻止斗争の過程で、「虐げられし全人民の交流・連帯をもって斗う」ことの内実を更に豊かにすること、同時に明大当局や国家権力の徹底した差別・分断・支配の強化に確実に具体的な反撃をなし切る体制の構築と、民青や革マル派などの宗派による醜悪な敵対を、大衆運動の階級的発展、全人民的利害の防衛にとって桎梏でしかない部分を、全都・全国の斗う学友、とりわけ早大解放斗争を不屈に押し進めている早大諸君との連帯した力をもって、Ⅱ部文学部での頑強な団結ー共同性を創出して階級斗争の一翼を担っていきたいと考えている。

私達の〝出発〟

駿台法学会事務局

〔「祭り」が語られる時〕

「祭り」が語られる時、必ずと言っていい程引き合いに出されるのが「パリ・コンミューンは祭りであった」というルフェーブルの言葉である。「祭り」とは、抑圧された者の〝表現〟とも言えよう。私達はむろん、「祭り」を「慰安」とせんとする支配者の意図を断じて拒否する。

今、私達が学園「祭」にかかわる時、私達のありのままをぶっつけ、自分自身を知り、獲得する〝表現〟の場にする事を通してかかわる。死んだムダ話はいらない。生きた言葉と音楽と具体的行動をもって参加しよう。

「駿台祭を我がものにする！」とは、あらゆる手段を用いて、自らを〝表現〟する事であろう。そして、それは自分自身の存在＝24時間生活総過程を知り、自己の人格としての尊厳を獲得する事。それは、まづ自分自身を〝表現〟する事からも始まるであろう。彼岸の理念や観念（イデオロギー）ではなく、現実の生きている自分自身を知り、行動を開始する事である。

〔現下の情況を視る時〕

現下の情況を視る時、私達は怒りを覚えずにはいられない。学生会館のコンクリート封鎖、増々強化される＜ロックアウト体制＞、そしてⅡ部制度の完全な総合廃止策動。昨年度パンフで触れた＜学費値上げ＞が現に執行された今、それを通した＜差別・選別教育＞体制が、強行されようとしている。この明治大学の情況は、当然〝個別明治大学（資本）〟の問題ではない。労働力の獲保こそ資本の増殖の柱の一本である。

世界の動きは、直接各々に関係のない事ではない。米ソ友好、米中、日中、日ソ……「緊張緩和」と「平和共存」は、その背後に資本家階級の延命を賭けている。古代より「外交」は、「内政」であった。〝大上段〟の「分析」でなくとも、支配の環をめぐる階級の攻防は、誰の視にも明らかである。

ファシズムが危機感のアジテーションでなく現われようとしている。私的所有と分業秩序は、醜悪な「団結」を形成する。互いに悪無限の競争と敵対の内にしか生きるすべを持たない市民社会。ファシズムの基礎は「アウトローの集団」や「反動右翼」にあるのではない。だからファシズムの前に、民主主義なる取りすました幻想の産物は一撃の下に粉砕される。又、「民主主義」の名で、自ら民主勢力と名のるものらによって、幾多の〝反民主主義〟＝差別切り捨てが行われた事だろう。私達は自らの〝力〟を持たねばならない。〝差別・分断〟という資本の交配の環を打ち破る「団結」＝徒党を組むことだ。それは理念ではない。現実の具体的利害である。私達がそうした＜階級の視＞を持つとき、すべては明らかになる。

〔再び「祭り」が語られる時〕

再び「祭り」が語られる時、私達はそこに止まらない。

長沼判決、ミッドウェー横須賀母港化、刑法全面改訂、キム・テジュン強制連行、チリ反革命クーデターetc　「祭り」の時はまだ来ない。しかし、「祭り」を自分自身の手で創り上げるべく、行動を開始する事は出来る。　台祭は、少なくとも視るものではなかろう。

すべての諸君の参加を呼びかける。自分自身の存在を問う闘いを〝表現〟せよ。くり返し彼岸のイデオロギーに拝跪する小市民宗派運動（日共・革マル）に、労働者階級解放の大道はない。現在直下の自分自身の怒りを、欲求を〝表現〟する事。その只中から「団結」の形成へ向けた共同利害の獲得の闘いにこそ＜労働者階級解放＞の事業の道がある。

学生保険委員会

健康管理センター反対！

☆　診療所（無料）廃止反対！　　☆　入学試験（総合判定制）による障害者への差別反対！
☆　Ⅱ部差別反対！　夜間診療の拡充を！
☆　健保カードと学生課カードの合同化反対！
☆　カードの分離を遂行せよ！
☆差差別・選別を許さず自らの手によって健康を克ちとろう！

駿台祭参加企画（予定）
11月4日　pm2時　～　6時
11号館5階51番教室
映画　『さようならＣＰ』
講演　青い芝の会

センター報告をするにあたつて明大学健の立場

学生健康保険組合は、同志社大学の一学生が病気になり、治療費もなく病死したことを契機に、相互扶助の理念に基づき設立されました。これから十年の歳月を経ました。

現在、ＰＣＢ、大気汚染、海水汚染等にはじまり、交通事故、ストレス、とますます健康の維持増進は困難になっています。こうした社会に於て

健康管理センター構想に対する委員会の立場は「健保ニュース」の３号に於て、明らかにしてありますが、明大健保組合は、相互扶助の理念により、その目的の中心を治療（医療給付）に置いています。

大学当局は昨年11月、「学費改訂について（案）」と題するパンフ、17頁の３＜学生生活面について＞の〔健康管理〕の項に、こう書いています。

「健康管理面については、診療所や学生健康保険制度等の充実に努力してきましたが、現行の定期健康診断の受診率は決して満足できる状態ではないので、今後は、診療所、学生健康保険制度、学生相談室等を統合して活用し、予防医学的な面に重点をおく、「学生健康管理センター」構想を検討して、この点の改善に努力して‥‥」（‥筆者）。

ところが大学の診療所は、学生保険委員会よりの要求＝診療設備の充実、各科医師の確保、診療時間延長等＝が度々出されているにもかかわらず10年１日の如く、劣悪な設備、Ⅱ部学生無視の短い夜間診療と、まったく改善も充実もされていないのである。従って「充実に努力してきました」というのは全くのウソである。つまり、大学当局は、「診療所、学生健康保険制度、学生相談室を統合して活用し、予防医学に重点をおく」、すなわち来たるべき「学校保健法」の改悪に向けて、文部省大学学術局よりの要望＝保健管理センターの整備とその施設を中心とする保健管理業務の充実を目指すものである。

「センター」の性格を資料分析から規定するとそれは弱者を切り捨てる差別、選別（予防中心）となるだろう。センターの業務が治療中心ではなく、「予防中心」であると自から言明し、センターの対象は未発病者であるというとき、そして業務のひとつとして「入試に関する医学的問題、精神的適否の判定・処理」を行うとき、病気になった学生はセンターから見放され、また障害者は、勉強する意志をもちながら入学を拒否される。そしてこのような弱者の切り捨てを行いつつ、当局の型どうりの人間である「優秀人間」の育成を行う。「優秀人間」となり得ないと判断された学生は冷酷に切り捨てられる。

我々は、センターの健康を通した差別・選別に反対し、自らの手によって健康を克ちとっていく方針である。

＜「センター」の社会的背景＞

大学に於いては60年安保・70年安保と外部の政治社会情勢に対応する学生の中から、内部、つまり大学改革・帝大解体等、大学内に於いても、造反する学生があらわれた。これに対し、「大管法」をはじめとして種々の政策がとられ、政府財界の弾圧が大学にかけられた。そして、大学当局は自ら、社会への学問研究の提供と労働力の供給を行っているにすぎない大学の姿を認識しながらも、大学当局のニシキの御旗である学問研究の自主性とか自治とかいうものを、残していると自己満足するためにコンピューター導入による人間管理（＝健康管理センター）を受け入れ実施することによって、私たち学生を、政府ブルジョアジーに売り渡したのである。毎年センター構想を打ちあげながら予算上実施できなかった明大は、今年の学費値上げを財源として強力に推進しようとしている。

駿台労働運動研究会

今、明治大学に於いて駿台祭が、当局のロックアウト攻撃を先頭とした権力と一体化した管理体制のもと、この管理支配を食い破るなかから文化運動としての駿台祭が行なわれんとしている。

我々は、この明大の校舎を見れば、すべての校舎の廻りは、黒い鉄柵でおおわれ更にその上に金網を張りめぐらされ、出入口は随時ロックアウト体制をひけるような小菅の東京拘置所並の強固な門をもって学生に対して設置されている。そして学校当局は極力、公安と一体化して学生弾圧を行なわんとし、驚くべきことに今年7月中旬試験中にもかかわらず、学生の集会があると公安当局から知らされるや、その2日前になって試験を延期してまで校舎をロックアウトし、学生弾圧の為にはなりふりかまわぬ「学校運営」を行なっています。

しかし、この明大の学生に対する攻撃が単に個別明大のものであろうか、我々は現在進行しつつある社会総領域における権力の諸秩序の再編とその打固めが展開され、すべての労働者人民に生活総領域にわたる権力によるファッショ的な支配の宣徴が行なわれていると視ざるをえません。具体的には、国際的なブルジョアジー総体の危機を、日帝ブルジョアジーは帝国主又的対外政策の展開と、国内的には「日本列島改造論」なる帝国主又的再編を、全国的な合理化のドラスティクな進行をもって、労働者人民を資本制社会の労働力商品としての存在のみに徹底的に落しこめんとし、この非人間的な資本の攻撃に対し反対し起上った人人や、又この合理化に耐えられず「アル中」や「ノイローゼ」etcになっていく人々に対し、労働力商品でない人間は不必要であるという資本の論理の元、保安処分新設—刑法改悪をもって精神病院や刑務所にたたき込むという攻撃を、現在的に刑法改悪—保安処分新設を目論み、社共を巻込だ形で貫徹せんとしている。又この社会再編に見合った労働力の確保ということで、幼児から中高年労働者までも含んだ教育政策を、中教審路線として行なわれつつある。そして明治大学で、この間行なわれている「改革」なり「改革案」自体、現在理事会を牛耳っている日共系教授が何と言おうと、この中教審路線の範中でしかない。このことは、この間の学費値上強行や、Ⅱ部改廃についての当局の方針を見ればわかるだろう。

駿台労研は、昼間の労働過程と夜間の再教育過程を持っているということの、社会的な意味を対象化する中から、現在進行しつつある、再教育機関の高校から大学、そして各種専門学校そして通信教育までの、資本の要請と密着した教育機関のドラスティクな再編に、なかんずく明大のⅡ部改廃策動に対して、その資本制社会における役割の反労働者的性格を明らかにするなかから、絶対許さないものとして対決して行きたいと思います。

□二部四寮委員会□

＜荒廃の回廊より愛をこめて＞

つい最近、学園だよりかなにかに「学園の正常化がなされて、たいへん喜こばしい・・・ 云々」という記事を読んだ記憶がある。いわゆる＜正常化＞という言葉に僕らの多くは何かしらけきった気持になるのだけれど、それはそうと、こんな言葉を平気で使う大学組織体の強さとその冷たさに僕らは思わず背すじを冷たくする。しかし、このどうしようもない現実を僕らがじーと見つめるとき、次の対話が展開されるだろう。

「＜正常化＞とはいったい何だ？」

「今のような平和な日々をさしている。」

「何故そうなったか」

「過激分子を去年11月に全員逮捕し、建物に鉄格子の着物を着せ、過激分子のたまり場である学生会館にコンクリートを飲ませて、武装したからだ。」

「武装？」

「そうだ、防衛上、最少限度のやむをえない武装だ。」

「その武装で何を守るのだ？」

「それは君、大学の理念と自治だよ」

「その理念とか自治の実体は？」

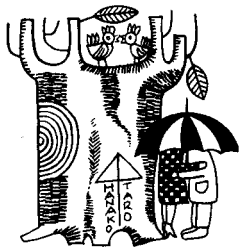
「それは・・・」

「僕らの寮も、大学の授業も何一つ好転していないし、そして又、11・19 の被告への大学の責任は？」

「・・・・・・」

大学は、沈黙を決めこんでいて答えようとはしない。否、答えられないのだ。なぜならロックアウトをし口を閉ざす以外の何の努力もしなかったのだから。そこで大学は苦しまぎれになって反対にこんなことをいった。「君、君達の尊い青春を犠牲にしてまで、そんなに執拗に追求するのか。」その時僕らは決してとまどわずこう答えるであろう。

「あなたがたが大学管理者であるように、僕らはとりもなおさず学生だからさ。」と



祝　駿台祭

渡辺工業株式会社

中野区本町５－９－１０
ＴＥＬ (384) 1722
(383) 3044

明　治　大　学

師　弟　食　堂

本校９号館地下